日本語教育におけるリソースと環境：
オーストラリアに関するデータの考察及び今後のリソース開発への示唆

ロビン・スペンス-ブラウン(モナシュ大学)

1. はじめに

第二言語習得，特に社会文化理論をもとにした近年の研究は，言語学習に対するリソース及び社会的コンテクストの重要性を強調してきた。言語習得を単なる個人の心理的活動として扱うのではなく，むしろ研究者らは学習者のコミュニティのダイナミクス，学習者の母語及び対象言語それぞれのコミュニティと学習者との関係の重要性を探求し，学習や他者とのやりとりから生じる社会的コンテクストによって個人の目標及び行動がどう形成されるかを示している。また，テクノロジーと言語学習に関する研究は，リソースの種類によって学習方式や学習内容が変わる可能性を示している。

5 つの調査地域におけるリソース及び環境を調査した本調査研究は，学習のコンテクストに関する重要な情報を提示しており，国による学習者のニーズの類似・相違点の理解，また今後役立つリソースの開発の一助となると考えられる。本論文では，特にオーストラリアに関するデータに言及しながら，データから分かったいくつかの点，また，今後のリソース開発に関して得られた示唆について述べたい。

オーストラリアではアンケート回収率の低さが原因となり，他調査地域のように大規模な調査データを集めることはできなかった。しかし，中学校・高校の少数の生徒学習者に対するアンケート調査(回収数 309)，小学校の学習者へのインタビュー調査(14 校で 383 名)，小学校における学習者の保護者に対するアンケート調査(回収数 832)，大学生に対するアンケート調査(回収数 43)，大学生に対するインタビュー(6 名)，教師に対するアンケート調査(回収数 104)，教師に対するインタビュー調査(42 名)を実施した。補足的情報として小学生に対するインタビューのために訪問した学校の教師からの情報収集，記録・資料の収集，学校訪問による観察も行った。

本論文では，以上のデータの中から，小学校での学習者及び教師に対するインタビュー，大学生に対するアンケート調査及びインタビューを中心に分析する。

2. 社会的コンテクストにおける学習者及び教師の学習動機とニーズの理解
—日本語課程における教育目的の広範化及び学習者の学習動機とニーズ—

2.1. 教育機関における日本語学習の目的及び適切なリソースのニーズ

オーストラリア等の外国では，ほとんどの日本語学習者にとって，言語学習は正規教育の一部である。高校や大学の上級レベルは他の学習動機を有するが，それでも全ての学習者にとり，学校・大学教育の要件を満たすという目標は，日本語でコミュニケーションできるようになるという目的と同等もしくはそれ以上に重要である。全ての言語教育プログラムはコミュニケーション能力の向上を目的としているが，教育機関における言語教育プログラムは他の重要な教育目的の達成も目指しているのである。

近年オーストラリアでは，小学校及び中学・高校のカリキュラムに以下の目標が強調されている[1]。

- 異文化理解及び異文化対応能力の向上
- 日本語学習と他の学習との融合ー例：歴史，地理，情報技術等
- 全般的な学力の向上
- 言語・コミュニケーション全般についての理解，全般的なリテラシー及び言語学習能力の向上

大学レベルでも多くの機関において，言語教育課程の中で文化，文学，その他，さまざまな日本研究の側面を教えることに重きがおかれている。これは一つには，上記がコミュニケーションに重要であるからであり，また日本語課程の教育的価値を高めるということも要因である。大学課程は，語学力に加え全般的な知性，知的スキルの発達も目指しており，文化，社会，異文化コミュニケーションの教育が課程に大きな深みを与えている。現代の言語教育では，言語についての学習よりも，実際の言語使用による習得に重きを置いている。これは小学校におけるイマージョン教育，大学における内容重視の教育において明らかである。日本語を使用して日本について教えることは，内容重視の教育課程や従来のトピック中心の教育，またタスク中心教育のシラバスにおいて理想的な題材となるのである。

本調査研究による小学校の教師及び学習者へのインタビューでは，オーストラリアの小学校カリキュラムでは文法スキルに重点が置かれていないことが多いと分かった。カリキュラムの多くは全ての科目を網羅するトピック中心の「統合カリキュラム」であり，個々の学校により異なる。ここではゲームやパズルといった興味を引き，楽しめる活動，またさまざまな日本文化の紹介が中心となっている。中等教育の初期段階では，口頭によるコミュニケーションに焦点が当たっているが，教科書が体系だった言語中心シラバスの学習を支えている。トピック中心のシラバスの多くには，グループや個人の課題研究が組み込まれており，正規のカリキュラムではやはり異文化理解に重点が置かれている。ただしこれは全ての学校において十分に取り組まれているわけではない。高校最後の２年間は大学進学を左右する試験の準備のため，言語学的な正確さ及び適切さがより重んじられるようになる。

教師や学習者にとってリソースが役に立つものとなるには，言語習得という目的に加え，学校や大学におけるより広範な教育目的を考慮してリソースが作られることが重要である。研究・分析能力などの他の学問的スキル，さらに文化・社会に関する学習など他のカリキュラム分野を統合するような内容の濃い素材で，かつ多種多様なプログラムにおいて利用可能なものが最も有用なのである。

2.2. 大学における学習者の目標及び学習者が使用するリソース

本調査研究において，教室外での日本語学習に関連する活動の種類を大学生にインタビューしたところ，そのほとんどは言語課程での学習に必要な内容に関連していることが明らかになった。課題に関連して論文，ディベート，クラスへの訪問者に対するインタビュー等のトピックを探すのに加え，語彙・漢字を勉強し，授業のノートや教科書を復習して

いる。学習者は漢字や語彙の学習だけではなく宿題や課題にも役に立つリソースが欲しいと考えている。したがって辞書などの参考資料をよく利用する一方で，大学の課題研究のためのリソースも必要としている。参考資料については，様々な辞書や文法参考書が利用可能となっているが，意味や適切さの微妙な違いを説明する資料がもっとあると便利だと学習者は述べている。学習者が授業を受けているのとは異なるカリキュラムに関連する教材はあまり役に立っていない。

本研究でインタビューした大学生，またアンケートに回答した大学生は特に真剣に日本語を学んでいる者である。アンケートでは 93%の学習者が教室外でも日本語を見聞きすると回答し，62%はその頻度を週に 1 度以上としている。しかしながらインタビューの中では，日本語の本など多くのリソースを集めてはいるが活用する時間があまりないという学習者もいた。授業に関連する活動に時間がかかり，日本語を別の形で勉強する時間と気力があまり持てないともコメントしている。ある学習者は，多くのリソースが利用可能ではあるがその所在を突き止めるのが必ずしも容易ではなく，リソースを活用する時間とやる気が一番の問題だと述べている。

学習者が学問的な勉強とは直接関係しない活動で日本語を使用する場合，余暇的な活動となることが多い。日本の音楽を聴く，日本の映画を観る，インターネットのチャットサイトに参加するなどがその例である。インタビューでは，あまり興味を引かない，おもしろくない，もしくは難しすぎる場合はすぐにその活動をやめてしまうことが示されている。アンケートのデータでは，日本語を見たり聞いたりするのは日本語の能力を向上させるためというのが強い理由である一方，「楽しい」というのも同等に強い動機となっていることが明らかになった(この質問に回答した学習者の 78%が，日本語を見聞きする理由の 1 つは楽しいからという内容に同意，もしくは強く同意と答えている)。最もよく利用されているものは「コンピュータ(インターネットを含む)」であった(この質問に回答した学習者の 82%がコンピュータ上で日本語を見聞きしており，39%はコンピュータが最も頻繁に使用するリソースであると答えている)。これは，コンピュータによってウェブサイト，電子メール，新聞，音楽など多種多様なものへアクセスでき，オーストラリアにおいてコンピュータ上のリソースが最も安価で利用が容易だという事実を反映しているのであろう。コンピュータ以外で頻度が高かったのは漫画(68%)，ビデオ・DVD(68%)，雑誌(50%)，書籍(46%)，CD(43%)である。新しいリソースが役に立つためには，アクセスが容易でかつ楽しめる内容でなければならないことがうかがえる。学習者は様々なトピックに興味を持っているが，上述のリストからは，オーストラリアでは他のアジア諸国ほど頻繁に日本の大衆文化が主流メディアに登場することがないにもかかわらず大衆文化(映画，漫画，音楽)が多くの学習者を惹きつけていることが明らかである。学習者は映画や音楽などを面白いと感じる一方で，現代の日本社会や日本語コミュニケーションを知る手段としても認識している。

多くの学習者は教師や友人とのコミュニケーションのために教室外でも日本語を使用している。ただし 37%の学習者は日本語でのコミュニケーションの機会が全くなく，学習者の多くがそういった機会がもっと欲しいと述べている。しかしながら，本調査研究のアンケート及びインタビュー，またオーストラリアで実施された他の研究[2]では，日本語でのコミュニケーションが重要だと認識しながらも日本人の友人とのコミュニケーションに英

語を使用しがちであると多くの学習者が認めている。オーストラリアでは英語を使うのが当たり前であるととらえられており，時として日本語への切替えが難しいのである。さらに，技術的な問題，タイピング速度や読解力の不足が電子メールやチャットでの日本語の使用を遠ざけることも多い。学習者が教室外で日本語を使用する一番の理由は「日本語能力向上や維持のため」(5 段階評価中 4.9)であり，他には，「日本人とコミュニケーションしたい」(4.5)，「日本語を使用するのが好きである」(4.4)などの理由が挙げられた。「日本語がコミュニケーション手段として最適」(2.8)，「仕事のため」(2.7)といった実用的な理由は比較的評価が低い。上記の結果からは，日本語母語話者や他の話者と日本語でコミュニケーションする機会をもっと学習者に与えることが望まれるが，さらにそういった機会において日本語の使用をより強力に支援，奨励する環境を整えることも重要であると結論付けられる。

3. 技術革新が与える影響

本調査は興味深い時期に実施されたといえる。調査期間中においてでさえ，研究者らは技術の進歩による急速な変化に気付かされることとなったのである。オーストラリアの大学に関するデータは 2004 年の終わりに収集されたが，コンピュータがもはや欠かせない手段となり，日本語を見聞きする機会，日本人と交流する機会を増やし，さらに学習者がリソースへアクセスする方法を変化させていることを示している。本調査の対象となった大学では課程のウェブサイトが教室外で利用するための情報やリソースを提供しているが，授業でコンピュータが頻繁に使用されることはない。しかしながら前に述べたように，教室外で最もよく見聞きするものを学習者に質問したところ，圧倒的に回答が多かったのは「コンピュータ(インターネットを含む)」(39%)であった。韓国も同様の結果である。ただし，他の調査国においては日本語を見たり聞いたりするためにコンピュータを利用するという回答は少なく，おそらく日本語のテレビなど他のメディアがより一般的であるのに加え，調査時にコンピュータやインターネット接続がさほど普及していなかったためと考えられる。しかしながら，今後全ての国においてコンピュータがますます重要になっていくことが予想できる。

学習者へのインタビューでは，電子メールやチャットの利用以外にも，新聞や興味のあるトピックのウェブサイトなどのリソースへアクセスするためにコンピュータを使用すると多くが回答している。こういったリソースは語学の授業で最初に紹介されることが多いが，その後学習者は授業とは関係なく利用するようになっている。コンピュータの使用によって，日本以外では入手困難な新聞記事などのリソースへ非常に容易にアクセスできるようになっている。同様に重要な点として，学習者がリソースを容易に理解できるようにするための手段もコンピュータが提供している。従来の辞書の利用では難しすぎてなかなか読み進めない素材を楽しく読めるようにしてくれるウェブ辞書や翻訳ツールを多くの学習者が利用していると回答した。オンラインチャットへの参加時にはオンライン辞書も利用可能である。興味深いことに，全ての学習者がこれらのリソースを認識しているわけではなく，こういったリソースが大学の全ての授業に組み込まれるまでには至っていないことが分かる。

コンピュータがもたらしたこと，つまり，リソースへのアクセス方法が目覚しく容易になったことと，リソースを理解するためのツールの力や利用し易さの向上が，日本語学習に与える影響を軽視することはできない。しばらく前までオーストラリアの学習者は大学の最終学年になるまで日本人向けに書かれたものを読むことができず，利用可能なリソースもほとんどなかった。現在，学習者は自宅で容易にネットサーフィンし，興味のある資料やウェブサイトを数え切れないほど見つけることができる。翻訳ソフトウェアで用語集や全文翻訳でさえ容易に入手できる。

日本語でのやりとりという点でも同様にコンピュータがもたらした劇的な変化がある。アンケート結果では，学習者は教室外での教師とのやりとりに，直接会ってのコミュニケーションとほぼ同じ頻度で電子メールを使用していると分かった。大学や語学学校の友人とのやりとりも，電子メールやインターネットでのチャットを電話より頻繁に使用している。その他の友人とは他のどのコミュニケーション手段よりも頻繁に電子メールを使用しており，チャットを併用している学習者も多い。これは，やりとりする相手が日本にいる場合が多いという背景があるのかもしれない。近年まで日本にいる相手とのやりとりは手紙と時折の高額な電話に限られていたが，現在では日本(もしくは日本以外の海外)にいる相手との日本語でのコミュニケーションの方が，オーストラリアにいる人とのやりとりよりも頻繁だとインタビューで回答した学習者もいる。

直接会う場合と電子形態のコミュニケーションには違いがあり，電子コミュニケーションは非母語話者の参加を促進する場合があると研究では示されてきている[3]。コンピュータが日本語母語話者とのコミュニケーション手段を格段に容易にし，新しいコミュニケーション形態をもたらしたことにより，学習者の言語学習，言語学習のニーズに今後大きな影響があると予測できる。オンライン上の文章を電子辞書を利用して読む，インターネットのチャットに参加する，また電子メールを作成するといった作業に必要なスキルは，紙の辞書を使って書籍や新聞を読み，手紙を手書きするのに必要なスキルとは大きく異なる。現在の段階では，日本語課程や日本語教師の多くはこの事実を十分に認識できておらず，そのため授業の焦点を変更できていない。この問題が今後数年の大きな課題となるであろう。

4. 日本への留学と日本以外での勉強の関係

大学での調査に回答した学習者の 74%は日本を訪れたことがあった。ただし，うち 53.3%は 1 ヶ月未満の滞在であった。小学校においてさえ，学校の旅行や交換プログラムで日本を訪れることを既に楽しみにしていると多くの学習者が答えている。日本へ行ったことのある学習者は皆日本で友人を作り，オーストラリア帰国後も電子メールや他の媒体を通じて連絡を取り合っているとインタビューで回答している。学習者は日本での滞在で日本の様々な側面や文化に興味を持つようになり，それが学習者のその後の勉強に影響している。日本へ留学したオーストラリアの学習者の多くは(日本留学の前もしくは後に)自国で日本語を学んでいるし，またオーストラリアで日本語を学んでいる学習者の多くは，いずれ日本へ留学するか，少なくとも訪問するようになる。自国での学習が日本への留学前の準備としてどう役立っているのか，また帰国後留学経験を基に自国での学習がどう積

み重ねられていくのかについてはさらに研究が必要である。確実にいえることは，インターネットの開発によって学習者は日本にあるリソースを利用でき，日本にいる相手と非常に容易にコミュニケーションが取れ，日本からの帰国後も日本滞在時のような恩恵を引き続き受けることができるのである。電子コミュニケーションの容易さが自国での学習に置き換えられることはないが，互いの利点を高め合うよう，両者は相互に影響し合っていくと考えられる。

5. 文化と言語の学習

前述の通り，異文化対応能力は，小・中・高校の日本語カリキュラムにおいて中心となっており，大学レベルでも文化と社会はカリキュラムの一部として重要である。本調査でインタビューした小学校の学習者は日本の文化に興味を持っており，その学習を楽しんでいる。大学生も日本の文化・社会に興味を持っており，特定の状況下における表現の適切さなどの社会言語学的な点を取り上げたリソースがもっと欲しいと考えている。多くの学習者は日本語の勉強を始めた理由の中に日本の文化や社会への関心があったと述べている。学習者が正規の学習以外で日本語を見聞きする場合の素材もこういった関心を反映している。調査では，日本の生活と社会，文化・芸術，日本と日本人といったトピックへの関心が最も高かった。

しかしながら，異文化理解，異文化対応能力は日本に関する知識のみを必要とするわけではない。学習者は自らの文化を理解し，日本についてはステレオタイプにとらわれず多様な面や変化を含めて深く理解しなくてはならない。多くの著者が指摘しているように，日本語環境における自分自身のアイデンティティを表現・確立できなくてはならないのである[4]。今日では日本の文化・社会に関するテレビ番組や新聞・雑誌も日本語学習者向け教材も数多くあるが，異文化理解，異文化対応能力の向上に役立つリソースを見つけるのは非常に難しい。

6. 今後どのようなリソースが必要か

学習者及び教師が使用している，もしくは開発を望んでいるという回答が最も多かったリソース，または今日の環境に必要と考えられるリソースは以下の性質を有している。

a) 柔軟性があり，現地の授業で教材として利用できるリソース

前述のとおり，学習者は独立型のリソースではなく，授業に関連して役立つ教材を望んでいる。オンライン辞書などの参考資料や，課題やプロジェクトを仕上げるのに有用な教材などである。自主学習リソース(文法，漢字，語彙など)は，授業から外れた内容を勉強するのではなく，課程で習った項目を学習するために使用する際に最も役に立つ。

上記から一ついえることは，自主学習，授業の両方で最も役に立つリソースは，既存の課程用教材と併用できるものと推察される。個々の国の条件に合う新しい課程用教材ももちろん大事である。しかし，柔軟性がなく，それぞれの国の状況や文化を考慮し

ていない独立型の教材はおそらくあまり有用ではない。

b) 楽しく有益であり，かつ学習者の関心に沿ったリソースと当該リソースを理解するためのツール

オーストラリアの学習者は興味を引くような魅力のあるリソースに慣れている。授業で学習する教材に対する学習者の最大の不満は「つまらない」である。課程とは関係しない自主学習向けのリソースは，授業で使用されるリソースよりもさらに魅力的で楽しめるものでなければならない。そうでなければ学習者は自主学習に時間を割かないであろう。学習者の関心は多岐にわたるため，それぞれの興味やニーズに基づき個別に容易にアクセスできるリソースが必要である。幸いなことに，大衆文化などの日本人向けの日本語素材がこういったニーズを既に満たしている。しかしながら学習者が理解するにはまだ難しすぎるものも中にはあり，学習者が日本人向けの素材を理解・鑑賞するためのツールがますます重要となる。

c) インターネット経由で速く安価にアクセスできるリソース，またはインターネット上の既存の日本語素材に学習者がより容易にアクセスできるリソース

前述のとおり，コンピュータ，特にインターネットは課程に関連する素材，また自主学習や娯楽のためのリソースを得る際の手段として急速に好まれるようになってきている。インターネット上の素材の多くは，柔軟性があり興味深く有益という前記 a)及び b)の要件を満たす。しかしながらインターネット上には当惑するほど大量の選択対象があるため，学習者の欲しいものの探索，内容の理解が容易であるとは限らない。インターネットに関してはリソース自体のニーズはそれほどなく，むしろ学習者のアクセスや理解を容易にするためのツールが必要である。

d) 日本語母語話者やその他の話者と日本語でコミュニケーションする際の人的リソース及びツール

日本語の使用が強く支援される環境において日本語話者とコミュニケーションする機会は，(それが直接会ってでも電子的であっても)日本以外で日本語を学ぶ学習者にとって非常に重要である。英語が堪能で英語を使用したいと考える日本人の数は増えており，そのため学習者が日本語を使用する機会がますます減ってきている。したがって，言語選択に関して学習者には特別な援助が必要だと考えられる。新しいコミュニケーション形態(チャットサイトなど)や，電子コミュニケーションへの学習者の参加をより容易にするようなコンピュータ上のツールも必要である。

e) 文化理解及び異文化理解のためのリソース

社会文化能力を獲得する際の大きな問題は，ステレオタイプを作り出し，文化や社会の特定の一部分を過度に重視しやすい点である。伝統的文化と新しい文化，主流文化と対抗文化など社会の多様性を示すリソースを学習者に紹介することが重要である。日本固有の事象を示すことも大事であるが，世界文化の一部としての日本文化を示すことも同じく重要である。国際文化フォーラムの写真素材など，人々の日々の生活を紹介する

リソースは非常に有用である。

アクセス可能で理解できる一次リソースに加え，文化的パターンや差異を規定することなしに理解させ，関心を呼び起こすような二次リソースも重要である。学習者が自らの文化と日本文化について考えるよう促し，学習者の文化リテラシー，異文化対応能力を発達させ，日本社会と交流する際の「第三の場所」[5]を創り出すのに役立つリソースがもっと必要なのである。

注

[1] ロビン・スペンス-ブラウン，萩野祥子(2006)「オーストラリアの年少者日本語教育―初等・中等教育機関における日本語教育の理念と実践―」『日本語教育』128 号，日本語教育学会

[2] Kurata, Naomi(forthcoming) Language Choice and second language learning opportunities in learners' social networks, *Proceedings of the 30th Annual Congress of the Applied Linguistics Association of Australia.*

[3] Spiliotopoulos, Valia(2005) Investigating the Role of Identity in Writing Using Electronic Bulletin Boards, *The Canadian Modern Language Review / La revue canadienne des langues vivantes*, Volume 62. Number 1, pp. 87-109

[4] Morita, N.(2004) Negotiating participation and identity in second language academic communitites. *TESOL Quarterly*, 38(4), 573-603.

Norton, B., & Toohey, K.(2002) Identity and language learning. In R. Kaplan (Ed.), *The Oxford University Handbook of Applied Linguistics*: Oxford University Press.

Peirce, B. N.(1995) Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.

[5] Liddicoat, A., Lo Bianco, J. & Crozet, C.(1999) *Striving for the third place : intercultural competence through language education.* Melbourne: Language Australia.